

# 金沢大学 資料館だより

No.7

KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM NEWSLETTER



1. 龍護寺旧蔵地蔵菩薩立像

## 目次

計算機たち、あるいは人類の 果てしない欲望	2
龍護寺旧蔵の彫像類について	4
金沢大学資料館所蔵 考古学資料紹介(1)	6
四高考古資料と北陸人類学会	10
資料館集報・新収蔵資料紹介	12

## ユニバーシティ・ミュージアムへ

昨年4月から今井治男先生（教育学部）の後を引き継ぐことになりました。

本学における資料館の役割・位置付け・将来像などというようなことを折にふれて考えています。金沢大学には、これまでに培われた本学特有のアカデミズムの雰囲気があります。第一期移転が完了したばかりのここ角間キャンパスにも、そのようなものが徐々に醸成されていくのが感じられます。このような雰囲気をより昇華させ、金沢大学特有のアカデミズムの佇まいをつくり出してゆくことに貢献することが本資料館の重要な役割であると考えます。資料館が足がかりとなってユニバーシティ・ミュージアムへと発展すればと考えています。学内の様々な分野の方々の御協力をいただきながら、この夢を叶えるための第一歩としての要求書作りにまでこぎ着けることが出来るようにと努めています。

大変微力ですが、資料館の発展に努めさせていただくつもりです。資料館について御意見・御批判をいただければこの上なく幸いに思います。

資料館長・大橋信喜美（理学部）

# 計算機たち、あるいは人類の果てしない欲望

田 中 一 郎

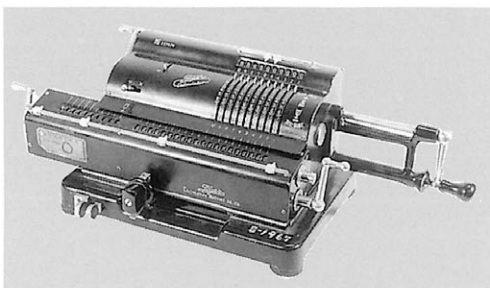
最近になって小型の電子計算機が急速に普及したため、かつては全盛を誇っていた機械式の計算機には博物館でしか出会えなくなっている。単に我々の身の回りから消えたというだけでなく、わずか2世代ほど前までは大学や高校の実験室の主要な備品であったという事実も、そのガチャガチャ、チーンというけたたましい音のほうも我々の記憶から消え去ろうとしているのである。これと類似したものとしては計算尺があるが、こちらのほうはまだ購入が可能とはいえ、計算尺もまた特殊な用途を別にするとほとんど使われることがなくなっている。

それでもこれらの計算装置は、計算の手間を省こうという人類の欲求がいつの時代にもあり、その欲求が際限のないものであるということを示す記念物として記憶に留めておくに値する。とりわけ最近になって金沢大学資料館に収納されることになった機械式計算機には手動のものと電動のもの2種類があるが、原理的には17世紀のパスカル以来の300年間にわたる一連の改良の試みの結果として生み出され、いわば完成の域に達していたのである。

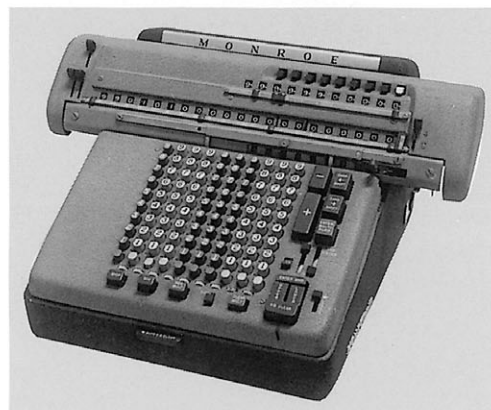
この機械装置の原理は至って単純であって、クラ

ンクをまわすことによって、電動式であれば回転させたい回数のボタンを押すことで数付き歯車を回転させ、キャリッジを移動させることで桁上がりを実現していた。たとえば123×45であれば、上部のダイヤルの百の位を1、十の位を2、一の位を3に合わせる。そしてキャリッジを十の位に合わせてクランクを4回まわり、次に一の位に合わせて5回まわしてやる。そうすると、下のカウンタに5535が表示される。割り算の場合は、クランクを逆に回転させることによって同じ操作をすれば実現できる。つまり足し算を繰り返すことで掛け算を、引き算を繰り返すことで割り算を行なっているのである。少し工夫さえすれば平方根を開くこともできる。

もちろん実際の仕組みは単純ではないし、その製作も容易ではなかっただろう。度重なる改良があつてようやく、つかの間とはいえ実験室の常備品としての地位を獲得したのである。パスカルが考案したのは桁送りができたとはいえ、棒で歯車を回転させねばならないという不便この上ないものだった。その後ライプニッツによって可動式のキャリッジが導入された。もっとも日本においてごく最近まで一世



Tiger 連乗式計算機



Monroe 電動式卓上計算機



SONY 電子式卓上計算機



Canon 自動化学分析装置

を風靡していたのは「タイガー式計算機」と呼ばれた国産のもので、17世紀の初期のものとは比べものにならないほど使い勝手が改善されていた。

この機械式計算機は今日では小型電子計算機、特に電卓と呼ばれているものにとって代わられたとはいえ、今日の電卓はある意味では機械式計算機の末裔ではない。電卓では計算過程を眺めることも、肉体の一部を通して体験することも、我々から奪われてしまっているのである。つまり算盤にしろ、機械式計算機にしろ、手を動かさねばならない。だから実際の計算の操作は、頭脳の内部において実行されている。ここから、何かを省くことによって利便性を追求することは、同時に何かを失うことであったということを読み取ることも可能かもしれない。我々は計算の手間を省くことができ、しかも安価で携帯可能な電卓という計算装置を手に入れた代償として、あの小さなブラックボックスに身を委ねてしまったのかもしれない。

忘れてはならないのは、こうした計算機の発達と平行して、計算尺と総称される計算装置もまた独自の発展を遂げていたという事実である。16世紀のそれがしばしば比例コンパスと呼ばれたことから推測できるように、初期においては一種の計算早見表に

すぎなかった。それでも、線分の等分割、3乗根の計算、円に内接する正多角形の作図などが可能だった。その後この計算尺には可動の目盛り（滑尺）が取り付けられ、その仕組みからして解答は数値によって表示されないが、掛け算や割り算だけでなく対数計算すらできるほどにまで改良されて現在に至っている。

もっとも前述したように、この計算尺もまた特殊な用途を除いて姿を消し、具体的な数値によって解答を表示するデジタル式の計算機が全盛となっている。奇しくもアナログ式の時計や温度計が実験室から駆逐されていったのと同時期であった。

この計算尺の衰退は、機械式の計算機の場合とは違い、定性的なものよりも定量的なものの方を上位に置こうとする近代的思考の必然的な帰結だと思われる。小型の電子計算機に駆逐された事情は違っても、計算尺を見捨てたことによって失われたものと獲得されたもの、さらには機械式計算機から電卓への移行によって同じように失われたものと得られたものについての貸借対照表を作っておくのも何がしかの意義はあると思われる。

資料館に新たに収納された計算機を眺めながらこのようなことを考えてみるのも無駄ではないだろう。

(1996年2月) (教養部科学技術史)

#### 〈収蔵小型計算機一覧〉

No.	機種	形式	動作原理	寸法(cm)	取得年月日	取得価格	旧蔵
1.	SONY 電子式卓上計算機	SOBAX ICC-200	Tr.ICによるもの	20×24×6	S.46.12.8	140,000	工学部
2.	横河 Hewlett-Packard 社	MODEL 9100A	2進直列演算方式	50×40×20	S.45.1.13	1,694,000	工学部
3.	SHARP コンパック	PC-1001	LSI	14×23×8	S.48.6.22	119,000	工学部
4.	Tiger 連乗式計算機	No.117676	手廻し (20桁)	15×30×14	S.29.9.25	35,000	工学部
5.	横河 Hewlett-Packard 社	HP-35	電子式	8×14×3	S.47.9.13	150,000	工学部
6.	Diehl 社	DV-12	機械式電動計算機	45×29×20	S.45頃		工学部
7.	Canon 自動化学分析装置	AX-1		50×56×19	S.54.3		附属病院
8.	Casio 電子式卓上計算機	AL-2000	電子式	42×34×15	S.45.1.22	295,000	教養部
9.	Nippon Calculator 手動式卓上計算機	SM-21 No.95535	機械式	18×40×14	S.39.4.1	32,000	教養部
10.	Monroe Calculation Machine Company 電動式卓上計算機	MONROE	電動式	36×38×22	S.39.4.1	345,000	教養部

# 龍護寺旧蔵の彫像類について

北 春千代



2. 如来形坐像



4. 天部立像



3. 天部立像

平安時代は、桓武帝の延暦13年(794)の平安遷都から、源頼朝により建久3年(1192)、鎌倉幕府が開かれるまでの約4世紀の間をいう。

彫刻史では、この時代のはじめ100年間、9世紀の大部分を平安時代前期とし、中国との交流により晩唐の密教が我が国にもたらされ、神秘性が強く、どっしりとした量感に富む、いわゆる貞観仏が生み出された。

のこりの300年間、10～12世紀を平安時代後期、いわゆる藤原時代といい、遣唐使の廃止により和風化のすすんだ時期で、一般におだやかで、やさしさのある像容の仏像が造立された。

金沢大学資料館に蔵する、もと富来町酒見の龍護寺に伝わった4軀の仏像は、朽損がはなはだしいが、平安時代後期、11世紀頃の作行を見せ、石川県内にあつて特筆に価する彫像類である。

## 1. 地藏菩薩立像 木造 1 軀 (表紙)

平安時代後期 11世紀頃

像高(現状) 148.0 頂～顎 26.5

面幅 14.0 耳張 19.0 面奥 20.5

臂張 49.0 袖張 51.5 裾奥 36.0

躰奥 26.0 奥行 33.0

桧材、一木造、彫眼。円頂で、なだらかな肩、衿

衣を着けて立つ通例の地藏菩薩である。両手首から先、足先を欠失し、持物なども亡失する。

全体に朽損と風化が著しく、そのため目鼻だちなど面容もはっきりしないが、それでも衣文などに力強い彫口を窺うことができる。内刳のない古様な一木彫成の丸彫りで、堂々とした量感に富むボリュームを見せる。また大腿部正面の盛り上がりを強調するため衣襷をY字形に刻むのは、通常9～10世紀の特長であるが、衣文の捌きなどに一部煩雑な点もあり、年代的には平安時代後期の11世紀頃と考えられる。

地藏菩薩は釈迦入滅の後、弥勒菩薩がこの世に現われるまで、五濁悪時の無仏世界にあつて、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上の六道に輪廻転生する衆生を解説せしめ、中でも地獄からの救済を本願とする菩薩とされる。

## 2. 如来形坐像 木造 1 軀

平安時代後期 11世紀頃

像高 89.0 頂～顎 31.5 面幅 15.5

耳張 23.0 面奥 23.5 臂張 50.0

躰奥 27.0

桧材、一木造、彫眼。背刳を施す。左右の手の肘から以下と膝前部を欠失する。

朽損や虫食い、それに風化が全体的に激しく惜しまれ、そのため尊名を特定できない。

背剝を施すが背板は亡失する。髪部が覆い被さるかのような狭い額など貞観様の作風を見せるが、丸顔で、やさしい面容などから、古風を残した平安時代後期、11世紀頃の作例になる如来形の一つと考えられる。

### 3. 天部立像 木造 1 軀 (4 ページ上段右図)

平安時代後期 11世紀頃

像高 (現状) 99.0 頂～顎 27.0

面幅 12.5 耳張 17.5 面奥 17.5

右～左肩矧付幅 33.0 右腰～左肘 52.0

躰奥 20.5 奥行 24.5

桧材、一木造、彫眼。右臀部と左手首以下、右足先、左足を欠失し、持物なども亡失する。

朽損や虫食い、風化が激しく、尊名を明らかにできないが、4の天部立像と相対する形から、おそらく四天王の内の持国天ではないかと考えられる。

持国天だとすれば、本来は、右手をあげ、剣を執り、左手を腰に当て、右足をあげて膝を曲げ、邪鬼を踏む姿であったであろう。

### 収蔵経緯と背景

当館収蔵の龍護寺旧蔵の4体の彫像類は、本学教育学部美術教室から平成元年に当館に移管された。これについて、美術教室への収蔵に直接関わられた元本学教育学部教授米林勝二氏にうかがった収蔵経緯は、次のとおりである。

昭和27年(1952)、羽咋郡富来町酒見龍護寺に、朽損した仏像があり、檀家が壊して護符にしようとして計画している、その仏像を本学教育学部美術教室で貰い受けてはどうかと、玉井敬泉氏から勧めがあった。玉井氏は日本画家であり、当時、石川県史跡名勝天然記念物調査委員、県神社仏閣古美術調査員をしておられた。そこで米林氏が龍護寺に赴き、比較的保存状態の良好な4体の寄贈を受けた。風化した残りの諸仏は、現在も龍護寺で保管されている。

龍護寺は、曹洞宗寺院。「貞享二年寺社由緒書上」によれば、応永2年(1395)に建立され、総持寺直末三十六院の1つに数えられる。

これらの仏像は近くの谷に捨て置かれていたのを龍護寺に運び込まれたものと伝え、明治の神仏分離令で処置に困り龍護寺に譲られたものともいう。この点について、櫻井甚一氏は、もと酒見地区の氏神

### 4. 天部立像 木造 1 軀

平安時代後期 11世紀頃

像高 (現状) 110.5 頂～顎 25.5

面幅 12.0 耳張 16.5 面奥 18.0

右～左肩矧付幅 25.5 右腰～左膝 39.5

躰奥 23.0 奥行 23.0

桧材、一木造、彫眼。両臀部以下と両足先を欠失し、持物なども亡失する。

朽損や虫食い、風化が激しく、尊名を明らかにできず、必ずしもいいきれないが、おそらく四天王の内の増長天ではないかと考えられる。

増長天だとすれば、本来は、左手をあげ、戟を執り、右手を腰に当て、左足をあげて膝を曲げ、邪鬼を踏む姿であったと思われる。

このようにこれらの彫像類は、構造的に平安時代前期の貞観様の古風な点を指摘できるが、作風の表現には平安時代後期の特長が随所に表れ、古風さを残した地方作と思われる。しかし石川県内にあっては数少ない作例であり、保存状態は良好ではないが、特筆される貴重な仏像である。

(石川県立美術館学芸課長)

である<sup>すくひこな</sup>少彦名神社の旧像であったという伝承を重視すべきであり、本学に寄贈された四体を含む朽損仏は、龍護寺に客仏として安置されている木造薬師如来坐像(県指定文化財)と、一連のものであるとしている(『富来町史資料編』)。

少彦名神社はもと薬王院と称し、かつて酒見地区にあった真言宗寺院・八津寺(谷内寺)を別当寺としていた。八津寺は富来町大福寺地区にあった真言宗寺院大福寺の末寺とされ、文化8年(1811)までは所在が確認される(「少彦名社遷宮慶賀祭覚書」)。高爪神社の別当大福寺は大宝2年の(702)創建で12坊があったとされるが、近世初頭には北之坊だけが残っていた。明治元年(1868)の神仏分離令により寺僧は復飾し、高爪神社の神職になっている。

(付記) 富来町教育委員会 佐藤義裕氏および石川県立図書館史料編さん室 室山 孝氏の御教示をいただいた。

(在田則子 資料館)

# 金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介 (1)

佐々木 達夫, 在田 則子, 橋爪 直子, 波頭 桂

金沢大学資料館には第四高等学校, 石川県師範学校などに収蔵された考古学資料が保管され, 現在も資料が増加している。そうした資料を研究及び教育に活用するため, 資料館では収蔵目録を作成している。今回は第四高等学校旧蔵の資料のうち縄文土器を紹介する。資料番号は, 実測図番号と資料館の登録番号を記している。

表1 四高考古資料(1)

資料番号	時期	器種	部位	色 調	胎 土	文 様	備 考
1. B158-1	縄文	深鉢	胴部	外-黒茶褐色 内-茶褐色, 焼成-良	砂粒・並, 礫(-3mm)	単節LR	
2. B158-2	縄文	深鉢	胴部	両面-暗褐色, 焼成-良	砂粒・並	羽状縄文(両端に結節)	
3. B158-3	縄文	深鉢	口縁部	外-褐色 内-淡茶褐色, 焼成-良	砂粒・多, 礫(2mm)	単節RL	
4. B158-5	縄文	深鉢	胴部	外-黒褐-暗褐色 内-黒褐色, 焼成-良	砂粒・並	単節RL	
5. B158-4	縄文	深鉢	口縁部	両面-淡茶褐色 焼成-やや良	砂粒・並, 礫(-3mm)	単節LR	
6. B158-6	縄文	深鉢	胴部	外-淡茶褐-褐色 内-淡茶褐色, 焼成-やや良	砂粒・並	条痕	
7. B158-7	縄文	深鉢	胴部	両面-淡茶褐色, 焼成-並	砂粒・多, 礫(2mm)	単節RL	
8. B158-8	縄文	深鉢	胴部	両面-赤褐色, 焼成-良	砂粒・少	絡条体(6-7), 結節を 回転したS字状連続文	スス付着
9. B158-10	縄文	深鉢	口縁部	外-淡褐色 内-淡黄褐色, 焼成-良	砂粒・少, 礫(2mm)	単節RL	
10. B159-6	縄文	深鉢	口縁部	両面-茶褐色, 焼成-良	砂粒	両面-ミガキ, 条線(2.5- 3mm)三本	
11. B159-7	縄文	深鉢	胴部	両面-黄橙褐色, 焼成-良	白砂粒・多, 礫(2, 3mm)	単節RL	越中婦負郡長澤
12. B158-9	縄文	深鉢	口縁部	両面-茶褐色, 焼成-良	砂粒・多, 礫(-3mm)	単軸絡条体	
13. B159-8	縄文	深鉢	底部	外-黄橙褐色 内-黒褐色, 焼成-並	白砂粒・多	外-ナデ	
14. B159-9	縄文	深鉢	胴部	外-茶褐色 内-濃茶褐色, 焼成-良	砂粒・多, 礫(2mm)	蕨手削文	信州玉川
15. B159-10	縄文	浅鉢	口縁部	両面-橙褐色, 焼成-良	砂粒(1mm)・多	単節RL	伝灯寺腕穴前
16. B159-11	縄文	深鉢	口縁部	両面-黄橙褐色, 焼成-良	砂粒, 礫(2mm)	内-ミガキ	常陸椎塚
17. B159-12	縄文	浅鉢	口縁部	外-黄橙褐色 内-黒褐色, 焼成-良	砂粒	条線後, 刻文	
18. B159-13	縄文	深鉢	口縁部	外-茶褐色 内-黒褐色, 焼成-良	白砂粒	単節LR	
19. B159-14	縄文	深鉢	胴部	両面-黒褐色, 焼成-良	白砂粒(-0.4mm)	単節LR	椎口
20. B159-15	縄文	深鉢	口縁部	外-橙褐色 内-黄橙褐色, 焼成-並	砂粒・多, 礫(2mm)	外-縄文(単節RL)擦り 消し, 内-ミガキ	
21. B160-1	縄文	浅鉢	口縁-胴部	外-黒褐色 内-灰褐色, 焼成-良	砂粒(-1mm)	単節LR後条線(幅3mm) 口縁部文様帯(幅3mm) の文様, 外-ミガキ, 内- 縄文状圧痕後ミガキ	
22. B160-2	縄文	小鉢	口縁部	外-赤褐色 内-黒褐色, 焼成-やや良	砂粒(極小) 礫(-2mm)	条線(幅3mm)後, 刻目(幅 1mm)	
23. B160-4	縄文	深鉢	胴部	両面-灰褐色, 焼成-やや良	砂粒(-1mm)	不規則な圧痕後, 条線(幅 4mm), 内-ミガキ	
24. B160-3	縄文	深鉢	波状口縁 の一部	外-黒褐色 内-赤褐色, 焼成-良	白砂粒(極小)	半隆起線文, 条線(幅2.5- 3mm), 内-ミガキ	
25. B160-5	縄文	深鉢	底部	外-淡黄褐色 内-白褐色, 焼成-良	砂粒(-2mm)	不規則な圧痕(2-3mm) 後条線(幅2mmV字形)	
26. B160-8	縄文	深鉢	口縁部	外-茶褐色 内-黒褐色, 焼成-良	白砂粒(0.1-0.3mm)	粗状圧痕, 内-ミガキ, 単 軸絡条体?(左まき)	
27. B160-6	縄文	深鉢	口縁部	外-茶-黒褐色 内-黒褐色, 焼成-良	砂粒(-0.1mm)	単節LR後, 条線(幅3 mm)端部ナデ, 両面-ミ ガキ	
28. B160-9	縄文	深鉢	口縁部	外-黄橙褐-黒褐色 内-黄橙褐-灰褐色, 焼成- 良	砂粒(-0.5mm)	縄文施文後, 条線(幅4 mm)内-ミガキ, 口縁部内- ナデ	
29. B160-7	縄文	深鉢	胴部	外-茶褐色 内-赤-茶褐色, 焼成-良	白砂粒(-0.1mm)	単節LR後, 条線(幅2.5- 3mm)後, 外-一部ミガキ, 内-ミガキ	
30. B160-10	縄文	深鉢	胴部	外-灰褐色 内-濃茶褐色, 焼成-良	砂礫(-1.5mm)	単節RL後, 条線(幅3 mm), 内-ミガキ	

資料番号	時期	器種	部位	色調	胎土	文様	備考
31. B160-11	縄文	深鉢	胴部	外-茶-黒褐色(色ムラ有) 内-黒褐色, 焼成-良	砂粒(-2mm)	単節RL, 両面-ミガキ	
32. B160-12	縄文	深鉢	胴部	外-黒褐色 内-赤褐色, 焼成-やや良	砂粒・多 礫・多(3-5mm)	縄文施文後ミガキ(?)	
33. B161-1	縄文	深鉢	口縁部	外-赤茶褐色, 内-黒茶褐色, 焼成-良	砂粒・少	内-ミガキ, 条線幅2.5-3mm	
34. B161-3	縄文	浅鉢	胴部	外-茶褐色 内-赤褐色, 焼成-良	砂粒・多	単節RL, 条線幅2-3mm, 内-ミガキ	
35. B161-2	縄文	深鉢	口縁部	外-淡茶褐色, 焼成-良 内-淡茶褐-黒茶褐色	白砂粒・多 礫(3mm)・多	粘土紐張付後, 指圧文	
36. B161-5	縄文	深鉢	口縁部	両面-黒褐色, 焼成-良	白砂粒・多 礫(2mm)・少	内-ミガキ, 条線幅2mm	
37. B161-4	縄文	深鉢	口縁部	両面-黒褐色, 焼成-良	白砂粒・少	内-ミガキ, 条線幅2mm	
38. B161-6	縄文	浅鉢	口縁部	外-暗灰色 内-黒褐色, 焼成-良	砂粒・少 礫(2mm)・少	単節LR, 両面-ミガキ, 条線幅3mm	
39. B161-7	縄文	深鉢	口縁部	外-暗茶褐色 内-茶褐-暗褐色, 焼成-良	砂粒・少 礫(3mm)・少	単節LR後条線(幅4mm), 内-ミガキ	
40. B161-10	縄文	深鉢	底部	外-赤褐色 内-茶褐-黒褐色, 焼成-良	砂粒・少, 礫・少	両面-ミガキ	
41. B161-11	縄文	深鉢	底部	両面-黒褐色, 焼成-良	砂粒・少, 礫・少	両面-ミガキ	
42. B161-8	縄文	深鉢	口縁部	外-茶褐-黒褐色 内-赤褐-暗褐色, 焼成-良	砂粒・少	縄文擦り消し後条線(幅3-3.5mm)	
43. B161-13	縄文	深鉢	口縁部	外-赤褐色 内-暗褐色, 焼成-良	砂粒・少, 礫・少	両面-ミガキ, 条線幅2.5mm	
44. B161-9	縄文	深鉢	口縁-頸部	両面-暗褐色, 焼成-良	砂粒・少	単節RL, 両面-ミガキ	
45. B161-12	縄文	深鉢	胴部	外-暗褐色 内-黄褐-暗褐色, 焼成-良	白砂粒・少 礫(2mm)・少	単節RL擦り消し後条線(幅2mm)内-ミガキ	
46. B161-14	縄文	深鉢	胴部	外-暗褐色 内-黒褐色, 焼成-やや不良	砂粒・少, 礫・少	単節LR, 両面-ミガキ	
47. B161-15	縄文	深鉢	頸-胴部	外-暗褐色 内-黄褐-暗褐色, 焼成-良	砂粒・少, 礫・少	縄文後条線(幅2mm), 内-ミガキ	

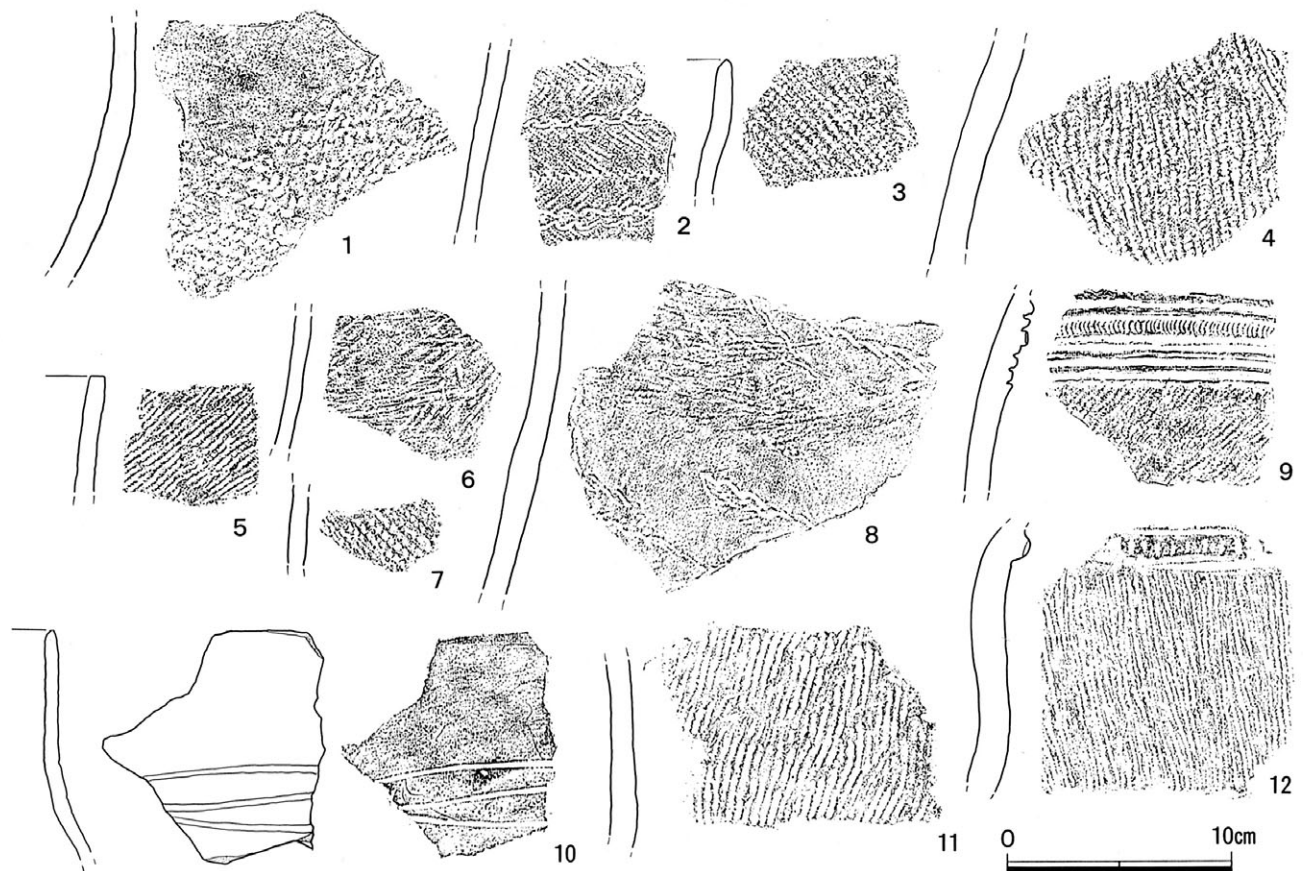


図1 四高旧蔵縄文土器

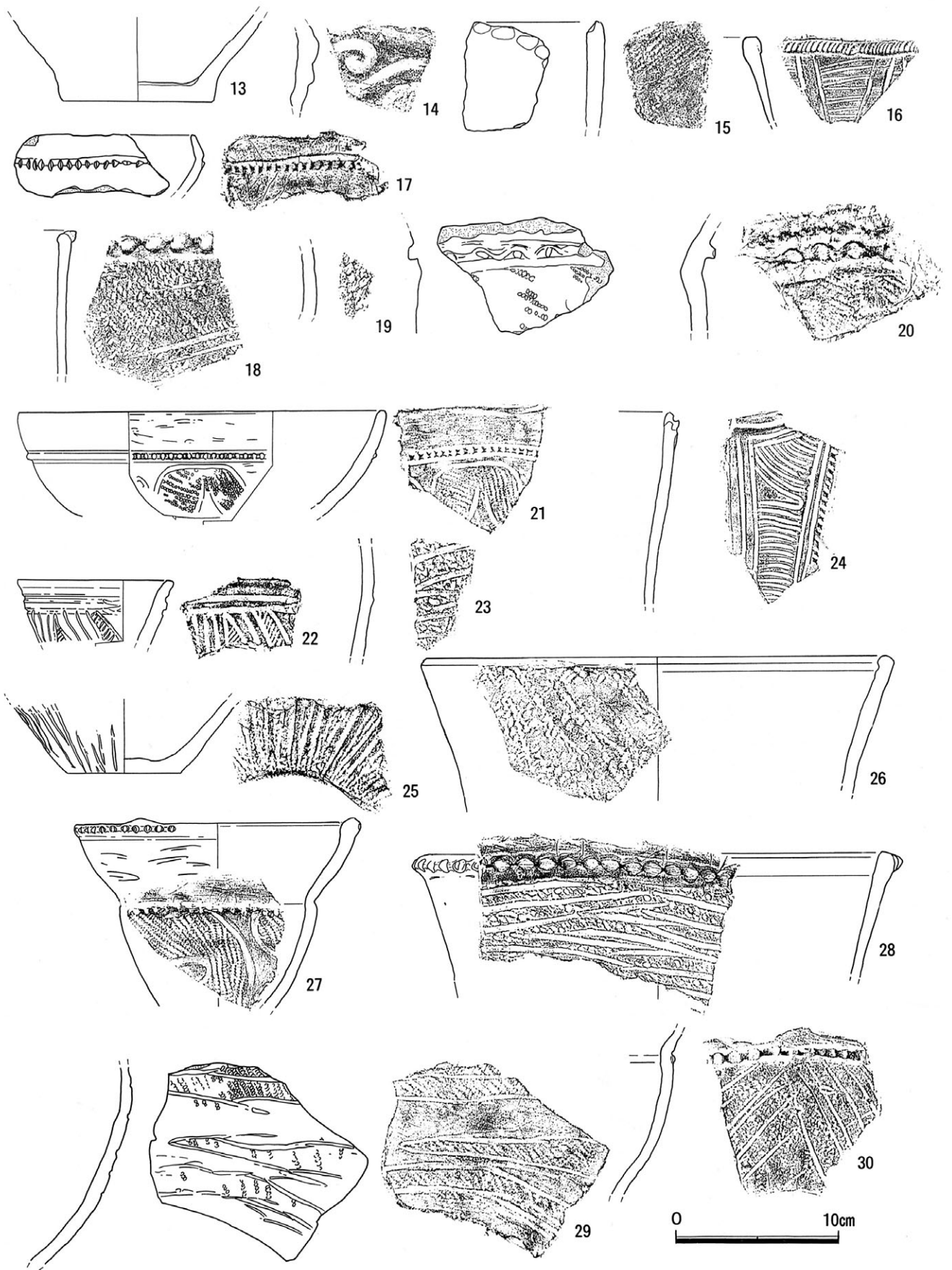


图2 四高旧蔵縄文土器



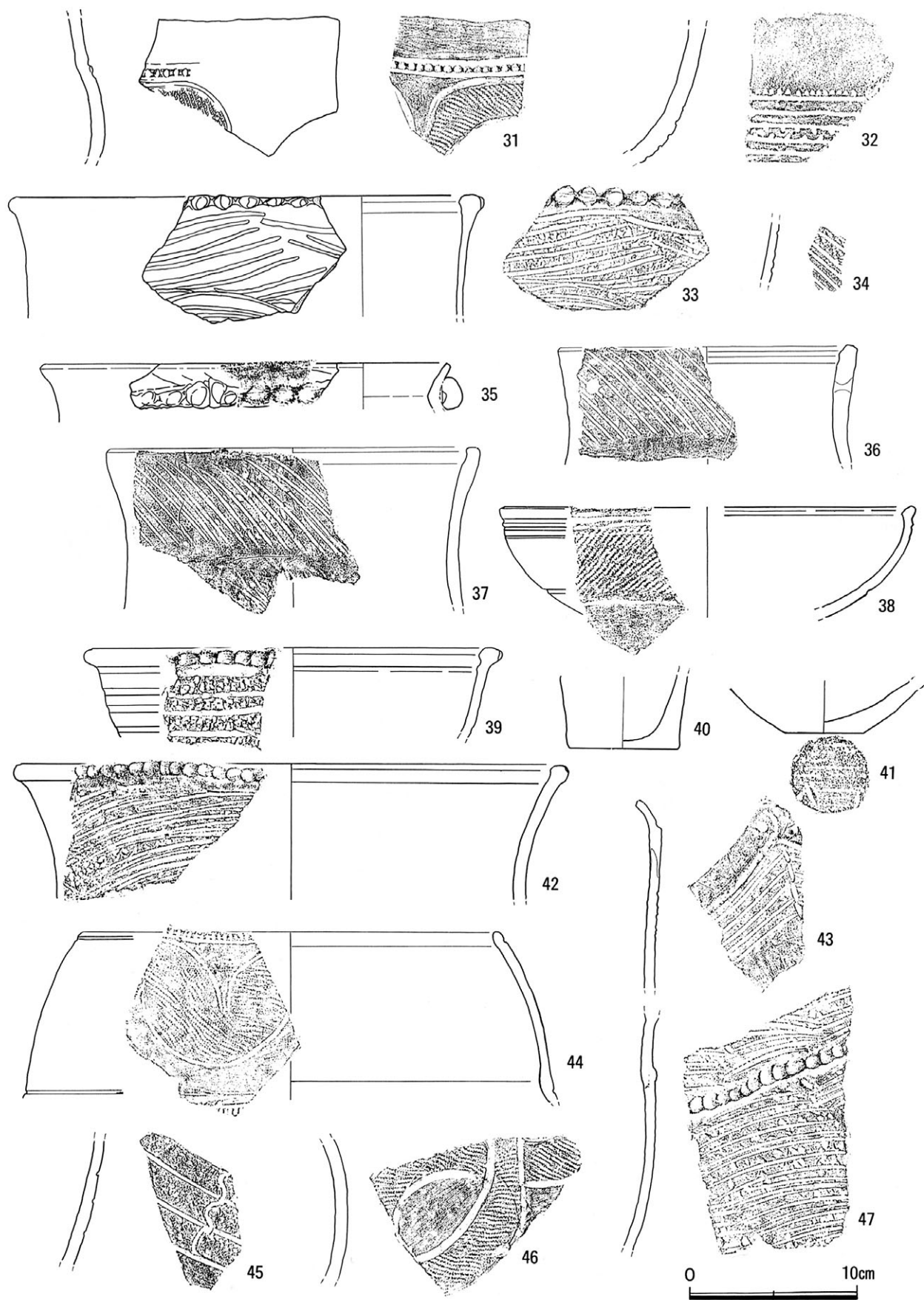


图3 四高旧藏繩文土器

## 四高考古資料と北陸人類学会

当資料館の所蔵資料に第四高等学校旧蔵の考古資料がある（以下四高考古資料と呼ぶ）。これは縄文・弥生・古墳時代の遺物を中心とするもので、27cm×59cm×深さ6cmの木箱54箱分、約1000点からなり、第四高等学校から金沢大学に受け継がれたものである。資料に付けられている注記を見ると、採集の日付の最も古いものは明治17年（1884）5月であり、最も新しいものは大正13年（192）4月27日である。採集地は金沢近郊・能登・越前・越中の遺跡名が多く記されている。それらの資料の一部は、明治28年（1895）に金沢で創設された「北陸人類学会」の機関誌『北陸人類学会志』に記載されている。四高考古資料の核となったのは北陸人類学会が採集した資料であり、その後学会が消滅した後も収集は続けられたようである。

以下、この資料をとりまく明治時代における石川県内外の考古学・人類学界の状況に少し触れてみたい。

### 須藤求馬について

四高考古資料と北陸人類学会を結ぶ人物として四高で教鞭を取った須藤求馬（すどうもとめ）があげられる。須藤求馬はどのような人物であろうか。

本学文学部・法学部・経済学部事務部に保管されていた履歴書によると、安政4年（1857）3月8日阿波国美馬郡三島村大字三谷（現在の徳島県美馬郡穴吹町三島）に生まれている。明治10年（1877）4月に長崎師範学校小学師範学科を卒業し、11年2月徳島師範学校に赴任するが、13年3月同校を退職し、東京に出ている。同年5月から15年7月まで中村正直の私塾「同人社」に学び、16年9月に、東京大学古典講習科漢書課に入学した。同人社は、明治6年



四高考古資料

に開塾し、当時は慶応義塾・攻玉社とともに三大私塾と称されている。一方、古典講習科は明治15年5月に東京大学文学部内に正規外の課程として設けられ、翌16年2月には甲部と乙部に分けられた。須藤の入学したのは乙部で17年に漢書課と改称したものである。中村正直はこの乙部の教授として漢文学・支那学を担当していた。

明治20年10月に同課を卒業した須藤は、23年7月に大阪府尋常師範学校に赴任するが、25年3月には退職し、同年7月第四高等中学校に赴任する。金沢では5年間過ごし、その間に北陸人類学会の設立に深く関わることになる。

須藤は明治30年（1897）8月に熊本第五高等学校に移籍。五高では、29年4月に赴任した夏目漱石と在職時期がほぼ一致している。熊本大学五高記念館に保管されている履歴書によると、須藤は33年9月28日に退職し、翌34年3月16日依願免官になっている。漱石の五高時代の交流には須藤の名は見えないが、31年11月11日の山鹿地方への修学旅行に伴う出張命令が両者の履歴書に確認できることから、何らかの関わりは想像できる。四高での須藤の活動は『学友会雑誌』、『北辰会雑誌』に散見するが、五高では『龍南会雑誌』の雑報欄に任免の記事があるだけで人類学・考古学の活動は確認できない。

五高を退職した須藤はいったん上京し、明治42年（1909）4月13日に奈良女子高等師範学校（明治41年開設）に赴任し、大正6年（1917）4月27日まで、在職していた（『奈良女子高等師範学校一覧』、1917）。

### 北陸人類学会の設立

坪井正五郎が中心となって明治17年に発足した東京人類学会は、明治20年代末には各地に影響を与え、地方人類学会が相次いで誕生した。北陸人類学会もそのひとつである。

須藤は四高では国語・漢文の担当であったが、考古学・人類学に興味を持っていたようであり、四高に赴任して2年目の明治27年夏に奥能登に調査旅行をしている。その時の状況は北国新聞の次の記事で知ることができる。

須藤求馬氏は昨年能州巡回の時瀬嵐で祝部土器、朝鮮土器、及び石鏃を発見し、松波で磨製の稍大なる石斧を獲、（以下略）（明治28年9月5日付）

また、28年春には河北郡大根布（大野～荒屋）の砂丘地で遺物採集を行っており、この調査についても北国新聞に記載されている。

加賀なる大野より荒屋に至る一帯の沙丘地にて貝塚土器、祝部土器、朝鮮土器、及び曲玉管玉、石斧石簇その他の石器時代の古物を発見したり。(中略)前記の石土器は大野荒屋間凡そ一里半余の地積にて黒土の露出せる処にあり(以下略)(明治28年9月5日付)

こうした調査を経て北陸人類学会設立に向かうのだが、それを大きく促したのは、28年の帝国大学理科大学人類学教室の八木契三郎との出会いであったようである。八木は同年7月20日から23日間北陸地方へ学術目的の旅をし、主に加賀・能登・越中を踏査した。この時八木は金沢で第四高等学校教授岡村金太郎を訪ね、須藤は岡村の紹介で八木の知遇を得、前年の奥能登調査の時に得た遺物について語り、その一部を八木に贈っている。須藤はこの後東京人類学会に入会したと思われる(同会退会は大正3年1月)。

北陸人類学会設立直前の模様は、会誌第2編の「創立第一周年会務報告」に詳しいが、「世に公にし同好の士と相共にせんと評議此に一決」し、明治28年11月23日に発会式を迎えたのである。

#### 北陸人類学会の活動

北陸人類学会規則によれば毎月第1日曜日に定例会を開くことを原則とし、例会は数名の会員による講演があり、前回の例会後に採集した資料を展示し、会員相互の情報交換をはかる、というのが通常であった。会の活動は『北陸人類学会志』と『東京人類学会雑誌』に報告されている。28年11月創設以来順調な活動を続けており、30年8月に学会の推進役であった須藤が熊本第五高等学校に転任した後も、31年10月には会誌第3編が刊行されており、翌32年末までは毎月の定例会は行われている。しかし33年に入ると例会は滞りがちとなり、11月の創立第5周年記念会が会誌第4編(34年6月発行)にみえる最後の例会記事となる。東京人類学会の坪井正五郎は毎年の同学会創立記念会演説で過去1年の学界の動向について述べているが、33年10月、34年10月に、地方学



四高考古資料 須恵器

「第四高等学校敷地」と注記されている。筆跡は、須藤本人のものと思われる。

界の停滞に奮励を呼びかけているから、他の地方学会も同様であったと思われる。なお北国新聞では34年6月の会誌第4編発行の後、同年11月に学会第6周年記念会が、翌35年11月には第7周年記念会が行われたことを次のように報じている。

**北陸人類学会発会式廣告**  
 本月廿三日午前十一時當事務所に於て  
 發會式を舉行し且石器土器等八百餘  
 點陳列致候に付會員諸君御來會相成  
 度此致廣告候也  
 俱會員の紹介ある者は午後一時よ  
 り三時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 明三時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 治二時迄の紹介ある者は午後一時よ  
 内金沢市高岡町十一番地  
 北陸人類学会發起人

明治28年11月22日付北国新聞に見える発会式廣告

(前略)次で幹事の任期満限に付改選を行ひしに北山重正、板谷勤川、金子次郎三氏再選となれり夫より板谷氏は『大原女の風俗に就て』の題下に写生画数葉を示し一場の講話を試み終りて更らに茶話会を催し午後五時過ぐる頃散会したりと因に同会にては明春を期し雑誌第五号を発刊せん筈にて材料収集中なり尚目下全国にて東京、札幌、奥羽、松本、四国、中国、台湾各人類学会あるも雑誌を出すは東京を除くの外当北陸のみなれば旁々明年より一層会務拡張の方針を取り雑誌の材料をも吟味する処あるべしとなり(明治34年11月25日付)

記事で、板谷勤川とあるのは石川県工業学校に在職中の板谷波山(陶芸家・日本芸術院会員)である。第6周年記念会を報じた新聞記事からは会誌第5編刊行の意志があった事がうかがえる。

北陸人類学会は明治廿八年の創立にして其年の十一月廿三日をトシ発会式を舉行したるものなれば本年は即ち七周年に当れば依りて一昨日市内香林坊なる同会事務所に於て記念会並總會を開催せり当日の出席者は斯道に熱中せる十数名の会員に止りしが午後三時に及て先づ幹事北山重正氏は開会の辞を述べ次で前一年間の事務状況及び会計報告を為し尚ほ祝電数通を朗読せり(以下略)(北国新聞、明治35年11月25日付)

さて明治35年(1902)の創立7周年記念会後の会員の消息については『東京人類学会雑誌』から断片的に知る事ができる。36年7月に東京帝国大学理科大学助手大野延太郎が北陸・東海へ調査目的の出張をした際、北山重正が金沢で協力しており、出口米吉は同志に精力的に民俗学関連の論文の投稿を続けている。また、37年10月に行われた「東京人類学会創立満20年紀年祝賀会」に須藤求馬の出席が確認され、北陸人類学会が活動を停止した後も、彼らは人類学と関わりを持ち続けていたことがわかる。

(付記)情報・資料収集に、熊本大学附属図書館草野隆夫氏、および石川県埋蔵文化財保存協会三浦純夫氏の御協力をいただいた。(在田則子 資料館)

## 資料館彙報（平成7年1月～平成8年3月）

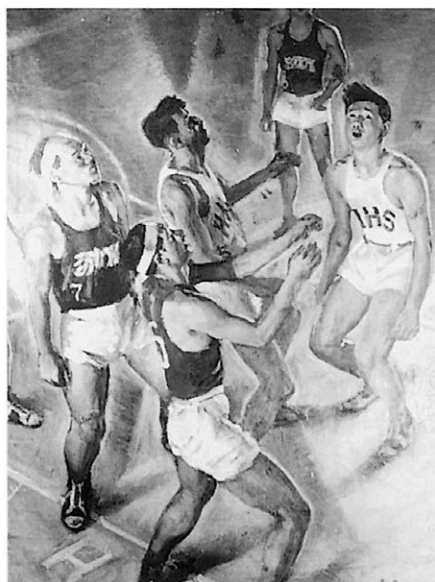
- 4月 今井治男前館長の任期満了にともない、後任として大橋信喜美・理学部教授が館長に就任した。
- 8月 金沢市立ふるさと偉人館の企画展「藤井健次郎展」のために四高資料ウルトラ顕微鏡を貸し出した。
- 10月 遠田運雄「籠球」（油彩画F80）を事務局から移管、収蔵した。
- 10月 資料館収蔵の四高物理機械について調査研究を進めるため、石川県教育委員会生涯学習課の関戸信次氏、佐藤正俊氏、石川県立田鶴浜高等学校の高瀬達也氏、および石川県立津幡高等学校の田淵憲志氏を客員研究員に迎え、協力をお願いすることになった。
- 10月 「ユニバーシティ・ミュージアム設置に関する構想委員会」が発足した。
- 12月 小型計算機10点を工学部、教養部及び附属病院から移管、収蔵した。
- 2月 教育学部美術研究室主催の「金沢大学教育学部 美術研究室 卒業・修了制作展」を開催した（2月26日～3月1日）。
- 3月 大学総合移転資料の収蔵が決定した。
- 4月 資料館主催の「旧制四高の物理実験機器展」を開催予定である（4月1日～4月3日）。
- 4月 石川県立歴史博物館春季特別展「加賀藩の武具」のために紺糸威二枚胴具足、白糸威六枚胴具足を出品予定である。

### 新収蔵資料紹介

「籠球」 油彩 F80 / <sup>とおだかずお</sup>遠田運雄 作

明治24～昭和30

金沢市出身。東京美術学校卒業後、京城帝国大学講師として勤務しながら展覧会への出品活動を行う。昭和4年に渡仏、サロン・ドートンヌ入選を果たす。帰国後は文展（現日展）に出品を続け、無鑑査出品や審査委員長をつとめる栄誉も得ている。昭和21年金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学）創設の際に指導者として招かれ、同25年金沢大学教育学部教授に転任。石川県洋画草創期の代表的画家の一人である。本作品は昭和24年第5回日展出品作で、同37年に遺族から金沢大学に寄贈され、長く城内の大学会館に飾られていた。



展示室を公開しています。見学を御希望の方は資料館準備室（64-5215）に御連絡ください。随時、御案内します。

---

### 金沢大学 資料館だより〈第7号〉

---

発行日：平成8年3月28日

発行所：金沢大学資料館

〒920-11 金沢市角間町 Tel 0762-64-5215

印刷：田中昭文堂印刷株式会社

〒920 金沢市小坂町中75 Tel 0762-52-7788

---